

第29回 「なぜなぜ分析」ワンポイント応用編

ここでは、拙著の本に紹介していない応用編について、紹介したいと思います。（ただし、いつか活字になるかも(?)しれません。お約束できませんが……）

あわせて、「なぜなぜ分析」の基本については、ぜひ当社ホームページ、インフォメーションに記載の書籍等をご覧ください。

2007年 4月 23日

有限会社 マネジメント・ダイナミクス

小倉 仁志

jin-ogura@management-dynamics.co.jp

要因漏れをなくすにはどうすればよいのか？

セミナーや社内教育でよく、「要因漏れをなくすにはどうすればよいのか？」という質問が出されます。

そのような質問には、以下のように回答させていただいております。

まず、要因漏れはなぜ発生するのか考えてみると、2つのケースが考えられます。

1つは、知識がないために、ある要因までたどり着けない場合。

もう1つは、知識・経験があるにもかかわらず、ある要因にたどり着けない場合。

前者は、知識不足を補う手段をとらざるを得ません。

この場合は、その分野に詳しい人を連れてくるか、またはこちらから聞きに行くことです。

一方、後者の場合は、事前に現物・現物による調査や、設備や作業の場合は部品や単位作業のつながりを再確認し(事前の調査が非常に重要!!)、その上で、つながりに基づいて細かく「なぜ」を繰り返していくことが必要です。

特に、あいまいすぎる表現が、一つひとつのつながりに対する不明確な捉え方までも誘発させてしまう傾向にあり、それによって要因漏れを発生させてしまっているようです。

例えば、コンベアのガイドがガタついているのを「ガイドがゆるんでいる」と表現してしまうのが、それに当たります。

この文は、「ガイドがガタついている」と「ガイドの固定ボルトがゆるんでいる」とい文を、うっかり一緒にしてしまった例です。(ガイドは決してゆるみません!)

このほかには、「逆から読み返してもつながる」といったルールや、前提条件を踏まえて「考えられる要因を全て書き出して」、一つひとつチェックしていくこと、さらには基本的な「現象」や「なぜ」に書く文は、1つの事柄にする」といったことをしっかり実施するとずいぶん要因漏れが少なくなってきます。

でも、そのためには何回も繰り返し「なぜなぜ分析」を実施しないと、そこまで気が回りませんが……。

以上

もし具体的な事例の「なぜなぜ分析」の指導をご希望される方は、遠慮なくご相談下さい。

ご相談は無料ですが、指導は有料にて実施させていただきます。

また、分析を実施していきながら、会社の仕組みや組織を活性化させたいとお考えの方も、ぜひご相談ください。皆様方のお声をお待ち申し上げます。